

愛を胸に抱く

[マルコによる福音書 10章 13～16節]

イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

[1] 子どもは「愛する存在」です

つい最近、宮里暁美さんという方の「子育て歳時記」という新聞コラムを見て、とても感動しました。今日はまずその記事をご紹介します。この宮里暁美さんは、文京区立お茶の水女子大学こども園の前園長であり、お茶の水女子大学の特任教授もなさっておられる方の方です。こういう内容でした。

(以下転用)

「孫のそうたろう君は二歳半になって、急におしゃべりが盛んになりました。これまで自分に語りかけられてきた言葉を、今度は相手に向かって発しているのでしょうか。困ったことが起こりそうな時には駆けつけて、「そた（自分のこと）がいるで（いるからの意味）だいじょぶよ」と言います。軽く自分の胸を叩きながら。

ある日、ワクチン接種でママが出かけることになりました。これは一大事。そうたろうくんとしては是非ともそばで支えたい場面です。「注射だいじょうぶかなあ」と心配するママに、いつもの言葉を言おうとして思い出しました。（そうたろう君は）ワクチン接種にはついていかないで、おばあちゃんと留守番することになっていたのです。一瞬の沈黙。（けれど）その後につこり笑って言いました。「とと（パパのこと）がいるでだいじょぶよ」と。ママのそばにはパパがいることを思い出したのでしょうか。

「そたがいればだいじょぶよ」という言葉は、ママやパパがそばにいれば大丈夫！という実感から生まれています。これまでの生活の中で味わってきたことを胸に、今度は誰かのために自分がそばにいてあげようとする。優しさの連鎖を見るようで心が熱くなりました。

そうたろう君はもうすぐお兄さんになります。ママのおなかかどんどん大き

くなり、ベビーベッドも用意されて、何だかいつもとは違うことが起こりそうな雰囲気の中で暮らしています。

「最近のお気に入りはこちら！」という言葉とともにママから送られてきた画像には、ママの抱き枕に抱き着いて気持ちよさそうに眠っているそうたろう君の姿がありました。安心して気持ちよさそうに。その姿からは「ママがいるからだいじょぶよ」と自分に語りかけている声が聞こえてきそうでした。

出産のためにママが入院したり、赤ちゃんとの生活が始まったりなど未体験のことだらけだけど、ママの匂いがする抱き枕がそばにあれば、きっと「だいじょぶ！」なんですよ。

(転用終わり)。

ご自分のお孫さんを見ていての文章ですね。とても素敵だと思います。何か人間というもの「原点」を教えてくれるような文章だなと思いました。

[2] 愛を受ける能力

私たちは子どもという存在を発展途上にある存在と考えやすいのではないのでしょうか。ですから子どもたちは「教育」を受けなければ成長しないと思ってしまうところがあると思いますが(確かにそういう一面はあるだろうと思いますが)、私はそういう「知的」な教育以前に、子どもには大人がびっくりするような力が初めから備わっているように思えてなりません。それは、私は「愛を受ける能力」と言いますか、「愛される力」というものではないか、と思います。

イエス様は、今日ご一緒に聞いた聖書の箇所、「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである」とおっしゃって、大人を叱ったのです。そして、「はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」と言われました。他の福音書の平行箇所では、「天の国はこのような者たちのものである」(マタイ 19:14)とも言われました。これは何を意味しているのでしょうか。私はそれを考えるヒントが、先ほどのそうたろう君の話にあるように思ったのです。誰かのそばにいてあげたいと思っているそうたろう君。何のてらいも遠慮もなく「だいじょぶよ」と言うそうたろう君。宮里先生は、「「だいじょぶよ」という言葉は、ママやパパがそばにいれば大丈夫！ という実感から生まれています。これまでの生活の中で味わってきたことを胸に、今度は誰かのために自分がそばにいてあげようとする」と書いておられました。本当に子どもってそうなのだと思います。これは「知的な教育」ではありませんよね。ママやパパの愛情を体いっぱい、心いっぱい、感じている・受け取っているから、それを真似をしている、自然と学んでいるのだ

と思います（学びとは真似び、とよく言いますよね）。子どもは愛を素直に受け取る天才ではないでしょうか。そして、素直にその優しさを現すことが出来る。

イエス・キリストは本当に子どもの味方ですね。逆に小さい者の一人をつまづかせるような者（大人）に対しては、「首に大きなひき臼を懸けられて海の深みに沈められる方がよい」（マタイ 18:7）なんていうこともおっしゃっています。人生にとって一番大事なことは**愛を頂くこと**。それを体ごと受けている子どもを妨げるな、この子たちの心をいたずらに傷つけることは、その愛という根っこを引っこ抜くようなものだ、とおっしゃっているのではないのでしょうか。

[3] 神様の愛は私たちに「孤立」させない

そうたろう君の話で、「抱き枕」というのがありましたね。お母さんがいつも使っている抱き枕。お兄さんになろうとしているこのそうたろう君が、お母さんの代わりに、お母さんのかおりを感じる抱き枕に抱き着いて寝ている。彼はこれから自立を始める中へと歩むのですけれども、その**自立を促し、支えるのも「愛」**なのですね。身近な愛。この子からそれを奪ってはいけないのだと思います。

でも、私たち**大人も全く同じ**ではないかと思います。いやもしかしたら子ども以上にそのような「愛」が「抱き枕」が必要なかもしれないと思いました。私たちは、独りで生きられる、或いは生きて行かなければならぬと「愛」を突っぱねることがあるように思います。でもそれは「**自立**」ではなく「**孤立**」だと思います。神様は、私たちに「孤立」させたくないのです。その為、「**私はいつもあなたと共にいる**」と、イエス様を送って下さったのです。イエス様は私たちの「抱き枕」です。いや、その抱き枕の方が実は私たちが抱いてくれているのです。

今日は「子ども祝福礼拝」を守っていますが、実は、子どもと共に、愛を受けることが下手になってしまっている大人に対する神様の招きもここにあるということです。「神の国」。これはいわゆる天国とも違うし、何か立派な、信心深い人たちだけが入れられるような国ではありません。そうであれば、神様は私たちにイエス様を送らなくても良かったのかも知れませんが、でもそうではなく、愛したいと思っても傷つけてしまう私、まことに弱くてダメな私、イエス様はそんな私たちをとことん受け止めて下さり、招いて下さっているのです。主は十字架の上で、両手を広げながら「**あなたは今日わたしと一緒にパラダイス(楽園=神の国)にいる**」（ルカ 23:43）と言って下さいました。この「**受容**」と「**赦し**」が、神の国の底に流れる調べです。

神様は、私たちを「愛」の中に創造して下さいました。どんな大人になっても、何歳でも、この愛の中に憩うことが出来ます。いや、それを主は待っていて下さっているのではないのでしょうか。

「子供たちをわたしのところに來させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。」

お祈り致します。

神様、今日の「子ども祝福式礼拝」をご一緒に捧げることが出来て感謝致します。あなたは私たちを、初めからあなたの大きな愛の中に創造して下さいました。それはまた、私たちが身近な者たち、他の人たちと愛を交歓して生きるようになるためであることを思わされます。

神様、私たちは実に弱い者です。時々、自分でも自分にあきれてしまうことがあります。しかしあなたの愛は私たちを孤立させません。絶えず招いていて下さいます。子どもたちを「わたしの所に来るままにさせておきなさい」と言われた主は、また私たちをも招いて下さいます。どうか、いつも私たちがあなたの愛に立ち戻り、それを胸に抱いて、自分を愛し、また隣人を愛し、共に生きる喜びの中へと導いて下さい。

ことに、小さな子どもさんをお持ちのご家庭を、あなたの恵みの中に支え、喜びを増し加えて下さいますように。主イエス様のお名前によって祈ります。

アーメン。